

大量出沒を想定した方策案

1. 概要

第1期（2012～2016年）では2012年と2015年にヒグマの大量出沒が発生し、2年間のみで64頭のメスが捕殺となった。第1期5年間のメス捕獲合計数82頭のうち78%が大量出沒年の2年間に死亡しており、大量出沒年の影響が非常に大きい。

ヒグマ管理計画の目標の一つである、「5年間でメス捕獲数75頭以下」を達成するには大量出沒年を想定した対策が必要である。第2期においても大量出沒が複数回発生する可能性は十分に考えられる。

大量出沒発生時には平時の方策に加え、危急的な方策を検討する必要がある。以下に方策案を記載する。これらの方策を実施する前提として大量出沒の判断基準が必要であり、また大量出沒予測のためのモニタリングが必要である。

2. 大量出沒を想定した方策

■利用者を対象とした方策

大量出沒時には人側のリスクが高まるため、平時よりさらに利用者の行動を制約する必要がある。

①遊歩道長期閉鎖

- ・フレペの滝遊歩道、羅臼湖などはヒグマ大量出沒年に長期閉鎖が見込まれる。
- ・2015年のフレペの滝遊歩道では85回もの緊急閉鎖が発生したが、長期閉鎖には踏み込まなかった。どの段階で長期閉鎖を実施するかなど指針が構築できていなかったことが要因であった。
- ・長期閉鎖実施の判断や開放の手順、広報の仕方などを検討し、体制を整える必要がある。

②特定の釣り場の閉鎖

- ・ヒグマ大量出沒年には特定の釣り場の閉鎖を実施する必要がある。
- ・2016年に幌別川河口ではヒグマが頻繁に出沒し、ヒグマと釣り人との軋轢が発生したことから緊急閉鎖となった。これは他の釣り場でも想定される事態である。立入禁止とした後もルールを違反する釣り人がいたことも課題である。
- ・閉鎖の判断や開放の手順、広報の仕方などを行動計画に織り込む必要がある。またルールを順守してもらうための具体的な対策の検討が必要である。

③電気柵緊急増設・貸し出し

- ・ヒグマ大量出沒が収まるまで電気柵の増設や貸し出しを実施する。
- ・緊急用電柵の備蓄を増やし、体制を整える必要がある。

④警戒を促す広報（住民、観光関係者、利用者）

- ・ヒグマ大量出沒年には、ハザードレベルが上がったことを広報し、住民や利用者

もリスクや制限が発生することを説明する。

- ・ 広報の具体的方法（チラシ、WEB、説明会等）を検討し、速やかに実施できる体制を整える。

■ 狩猟者を対象とした方策

ヒグマ大量出没年は狩猟でのメスの捕獲数が増える傾向にあった。そのため狩猟者に対し親子グマを見逃す等の要請を行う。

① 親子グマの狩猟自粛要請

- ・ 具体的な時期やエリアを選定するための会議の場を設定。
- ・ 広報の具体的方法（猟友会への働きかけ、狩猟マップへの差し込み、WEB、看板等）を検討し、速やかに実施できる体制を整える。

3. 捕獲上限目標の扱い

捕獲上限目標を目安として捉えるのか、より厳密に上限内に収めることを優先するかによって特に地域個体群に対する方策は異なってくる。

捕獲上限目標の達成を最優先する場合には、より積極的に捕獲数を抑制する方策の立案が必要になる。社会的に実現可能かは別にして、ヒグマ対策実務者として想定できる非致死の方策は以下の通り。

① 移動放獣

- ・ 市街地近くに出没するメス個体を麻酔捕獲し、奥地放獣する。

② 一時隔離

- ・ 市街地近くに出没するメス個体を麻酔捕獲し、餌不足が解消するまで一時隔離する。

③ 緊急給餌

- ・ 市街地からヒグマを離すため、奥地に給餌場所を設置し、餌不足が解消するまで給餌場所を設ける。餌は自然由来のもの（堅果、サケマスの残滓、シカの残滓など）とする。ヒグマが人と餌との関係を学習しないよう細心の注意が必要。

4. 大量出没の発生機序の解明

大量出没の発生は食物資源の不足によると考えられるが、そもそも食物の不足の原因が個体数増加によるものなのか、周辺環境の変化による食物資源減少なのか、あるいは複合的なものなのか不明であり、その究明が必要である。特に個体群に対する人為的介入を行う場合、その方策は原因次第で大きく異なってくる。少なくとも地域個体群の動態把握は急務である。